

全国市街地の変遷

昭和の記憶から次代へ

昨秋から広島市と呉市の街を背景に、第二次世界大戦後の一人の女性の日常を描いたアニメ映画「この世界の片隅に」が上映されている。

不幸が降り掛かって、その現実を受け止め、また、ささやかな喜びが舞い降りれば素直に享受し、幸せを感じる日常。この世界の片隅で私は生きていくという主人公の意思が、スクリーンにひびく。淡い色使い、劇場に流れる穏やかな音楽で脇を固めた。

とで広島市の現在と戦前の街の違いを改めて知ることができた。原爆投下直前まで広島

アニメ映画「この世界の片隅に」が教えるもの

大戦前後、女性の日常描く

とで広島市の現在と戦前の街の違いを改めて知ることができた。原爆投下直前まで広島

1945年には広島県燃料配給統制組合によって買い取られ、燃料会館と呼ばれていた。

爆を投下したという。83年に架け替えられ、被爆の痕跡は橋詰めに保存された親柱と、広島平和記念資料館に展示される爆風で変形した橋桁の一部を残すのみとなっている。

国際平和の発信拠点

原爆で中島地区には住宅がなくなり、商業施設もなくなった。そして54年、広島平和記念公園が完成した。忌まわしい過去を謝絶するのではなく、永遠に過ちを繰り返さない願いを込めて負の世界遺産がそこにある。居住の町から観光施設へと町は変わった。

原爆投下以前の町は、アニメ主人公のように江波から中島本町まで海苔を届ける生活の小舟が行き交っていたのだ。現在は観光船が川面を走る。昨年5月27日に米国のオバマ前大統領が広島を来訪したことも影響してか、最近と同程度規模の都市と比較して、欧米系観光客の割合が多いように思う。

広島市中心部は市民生活の拠点であると同時に、国際平和の発信拠点の観光地でもある。都心回帰といった生活スタイルの構造の変化との相乗効果から、広島都心とその周辺は現在、ホテル、マンションの建設に熱い力が入っている。原爆投下がなければ、広島市中心部の生活構造がどう変わったかわからない。ただ、この世界の片隅で、広島市民は生きている。

市内で多数の繁華街だった町、中島町。

役所と物資の集積地

元安川と本川に挟まれた中州に位置し、広島平和記念公園のある町として知られる。かつて中島地区には市役所、隣接には県庁があり、また、川を交通機関とした上流の芸北地域から広島港までの物資が集積する施設地でもあった。その面影をしのばせる唯一の証拠が大正屋呉服店の建物で、元安川のたもとに佇む。

現在は公園内のレストハウスとして利用されている。

元安川に沿って北西方へ足を進めると、対岸に原爆ドームを眺めることができる。15

(大正4)年に広島県物産陳列館という名称で開館され、45年には広島県産業奨励館と改称されていた。その名称からも広島商業の中心の一つだったことがうかがえる。

さらに北西を進めば丁字路の形をした相生橋である。上空からでも確認できるため、29はこの橋を目標物として原



広島平和記念公園。ガイドの説明を聞く欧米系観光客と記念碑



①原爆投下前からある中島町唯一の建物（大正屋呉服店） ②広島市の土地価格最高地点周辺

